

バイエルン州立図書館所蔵小野お通筆『源氏物語』製作契機再考

福田 智子

バイエルン州立図書館所蔵『源氏物語』は、辻英子氏により紹介された写本である。その筆跡から、小野お通筆とされている。従来、徳川秀忠が娘の千姫の輿入れに際し作らせた嫁入り本である可能性が指摘されていた。そこで、改めて検証してみると、写本が収められている箱の表に、清和源氏義光流、小笠原家の家紋「三階菱」が記されていることに気づく。この箱がお通書写本と同時に製作されたものとするならば、お通の活躍時期に、嫁入り本を必要とする可能性のある女子として、慶長五年正月、松平阿波守至鎮に嫁した、小笠原秀政女、萬姫が浮上する。なお、本書とともに「葵紋」が伝来するのは、彼女が徳川家康の養女であったことと関わるか。また、箱表の図柄は宇治の情景か。

一 はじめに

同志社大学文化情報学部では、三年生の選択必修授業に、「ジョイント・リサーチ」という授業がある。文系と理系の教員が組んで、いわゆる文理融合の演習授業を行うのである。いわば、本学部の目玉とも言うべき授業である。

矢野環先生・高橋美都先生と共同でその授業を担当した二〇一七年度から二〇一九年度まで、演習の対象として、バイエルン州立図書館所蔵『源氏物語』（以下、バイエルン本と称する。）を扱った。この写本は、辻英子氏が『在外日本重要絵巻選』研究編〔平成二十六年（二〇一四）

二月刊、風間書院〕で紹介され、全丁、写真版がDVD-ROMで見ることができ、この影印を翻字し、電子テキストを作成して、角川古典大観『源氏物語』所収の大島本・尾州家河内本・保坂本・陽明文庫本と、本文比較を行うわけである。文理融合の学部の授業らしく、本学部に学んだ坂田桂一さんが独自に開発した校本作成支援ツールと、本学部教員の深川大路先生が作成されたExcelのマクロ、それに、矢野先生のご指導のもとに使用するSpilis treeを組み合わせた本文研究である。バイエルン本は、いわゆる古写本ではなく、江戸初期の写本であり、『源氏物語』諸本研究に占める位置は重くはないとも見られようが、それでも、伝本研究などやったこともない、初心者の受講生を相手にしたとき、格

好の演習素材となった。バイエルン本をご紹介くださった辻氏の御学恩に感謝する他はない。

二 バイエルン本の伝来

辻氏は、前掲書所収『源氏物語』「きりつば」解題において、バイエルン本を、エヴァ・クラフト編纂のカタログ (Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH Stuttgart 1986) に拠って、次のように紹介されている。()内は辻氏。

小野のお通筆か。成立は一六一五年頃。綴葉装 五十四帖。縦二三・八×横一八糎。

字面 (Schriftspiegel) 一一〇・五×一五糎。表紙は濃紺紙に金銀で源氏絵を描く。見返しは金銀の浮かし刷 (空押) 文様。特別収集」⁶¹小野通源氏物語、淀の前の絵箱入り、葵紋付き。筆者は高名な女性詩人で、淀の前 (一五六七—一六一五。豊臣秀吉の側室。浅井長政の長女。母は織田信長の妹お市の方。淀君・ちゃちゃともいう。浅井氏滅亡後柴田勝家に再婚した母とともに越前北の庄にあり、柴田氏滅亡後秀吉に保護され、のち側室となった。長男鶴松、二男秀頼をもうけた。大坂夏の陣に自刃)、徳川千姫 (一五九七—一六六六。父は江戸幕府二代將軍徳川秀忠の娘。母は浅井長政の娘達姫。一六〇三 (慶長八) 年幼少の身で豊臣秀頼に嫁し大阪城に入る。お通は、小野正秀の娘で淀君の侍女となり、のち新上東門院に仕えて五八歳で没したともいわれるが未詳)。

金銀で源氏絵を描いた表紙、見返しも金銀の浮かし刷とは、極めて豪華な本である。また、豊臣秀吉の側室、淀君を指すという「淀の前」の絵箱に入っており、さらに、徳川家の葵紋付きという。そしてこの『源氏物語』の書写者が、淀君の侍女であった小野お通というのである。お通とバイエルン本との関わりについては、高橋亨氏「小野通女筆『源氏物語』と九条家の源氏学」『國語と國文學』第九十三卷第九号、平成二十八年 (二〇一六) 九月」に詳しい。お通は、徳川秀忠女、千姫が豊臣秀頼に輿入れする際、介添えを務めたという。バイエルン本を「秀忠が娘千姫のためにととのえた嫁入り本」と想定するのは、まずは穏当な見解だったのである。

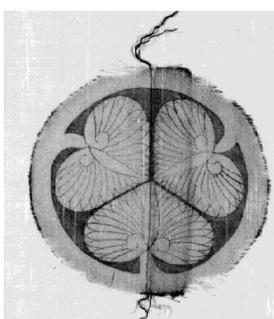
三 「淀の前の絵箱」

バイエルン本を千姫嫁入り本とする推論の根拠には、付属する木札の裏の記述と、葵紋の襖紗の断片の存在が大ききろう (以下、掲載する画像はすべて、辻氏前掲書付属の DVD-ROM に拠る)。

木札裏



葵紋襖紗断片



これらの付属品は、バイエルン本そのものや、その絵箱の豪華さと相俟って、自然とクローズアップされることになった。

だが、よく木札を見てみると、確かに、「淀・前」「絵・箱」とハイフンが付けられ、「淀の前の絵箱入り」と読むよう促されてはいるのだが、どうも「前」の字がおかしい。そのことに気づいたのは、バイエルン本を授業で取り上げようと思いついてから、一、二年は経っていたのではなからうか。実は、すぐには気づかなかったのである。

「前」の字が「前」ではないのではないかということに気づいてからは、授業を共同担当していた矢野先生、高橋先生も、「前」ではなく、「蒔」ではないかという見方に落ち着かれた。そうすると、「淀の蒔絵箱」ということになり、前掲のカタログのいう「淀の前」（＝淀君）の名も消えてしまう。そもそも、淀君のことを「淀の前」と記すというのも、あらためて考えてみれば、いささか妙だということにもなるのである。

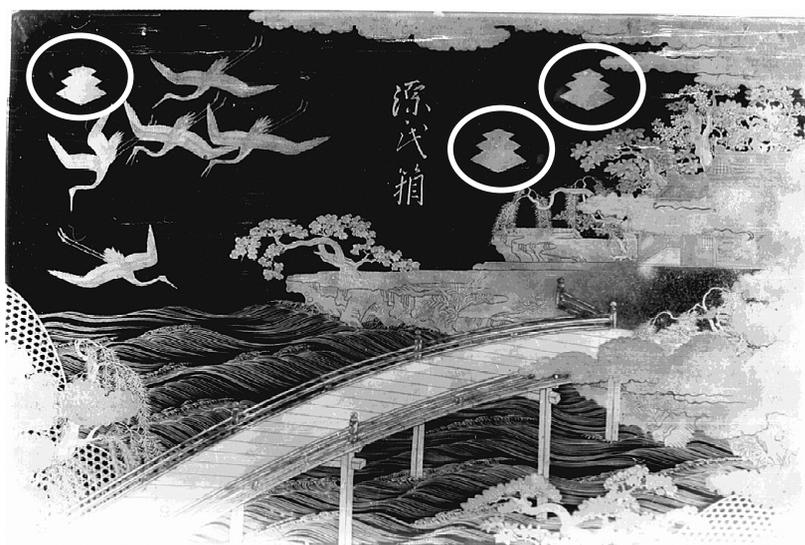
四 箱表の図柄——家紋「三階菱」——

そのような経緯で、バイエルン本の製作契機について、もやもやとした疑問を持ち続けることになり、外出の際には常に関係資料をバッグの中にしのばせて、ことあるごとに考えをめぐらせていた。しかし、なかなか代案を思いつかない。

そうこうしているうちに、岩坪健先生（同志社大学文学部）のご紹介で参加させていただいている大和郡山の柳沢文庫調査において、宮川葉子先生（元淑徳大学）、小倉嘉夫先生（大阪青山大学短期大学部）、佐竹朋子さん（当時、柳沢文庫学芸員）とご一緒する機会があった。令和元

年（二〇一九）六月八日のことである。そこでふとバイエルン本のことを思い出し、お茶を飲みながらその話を持ち出してみた。

すると、お三方ともやはり、例の木札の「前」は「蒔」で「淀蒔絵箱入」と記されていると判断された。すると、箱表の図柄は、「淀」の地の情景か、と考えるその前に、宮川先生が、「これ、家紋じゃないの？」と指さされた。箱表の画像には、まるでUFOが宙に浮いているような、菱形が三段重なった形が、三箇所に見出されたのである。いま、箱表全体の画像の中に、当該箇所を○で囲って示そう。



ここまでくると、話はあつという間にひとつの結論に達した。小倉先生が、「それは三階菱です。」とおっしゃる。また、佐竹さんは、「それ、小笠原の家紋ですよ。」と、数冊の本を取り出された。『新訂 寛政重修諸家譜家紋集』(続群書類従完成会、平成四年二月)四八頁(291)には、箱表と同じ形の紋が「三階菱」として掲載されている。また、『新訂 寛政重修諸家譜』には、次のような記述が見出された。

卷百八十九 小笠原(清和源氏義光流)

家紋 三階菱 五七桐

家傳に、三階菱は後醍醐天皇の御とき、先祖信濃守貞宗弓馬を師範したてまつり、叡感の餘り王の字を家紋とすべきむね勅命ありといへども、はゞかりあるをもつて、ひそかにその字をかたどりて松皮菱の下太と称し、家紋とす。いま三階菱といふものすなはちこれなりといふ。又五七桐は曩祖信濃守遠光より用ふといへり。

『新訂 寛政重修諸家譜』第三、続群書類従完成会、

昭和三十九年八月、三九九頁

つまり、この家紋「三階菱」は、清和源氏義光流、小笠原家の家紋だったのである。従って、もしこの箱が、お通書写本と同時に製作されたものとするならば、お通の活躍時期に、嫁入り本を必要とする可能性のある女子が、この家の人物の中に特定されればよいことになる。はたして、小笠原秀政女、萬姫が浮上することになった。慶長五年(一六〇〇)正月、松平阿波守至鎮よとしげに嫁したことが知られる女子である(『徳川実紀』元和六年二月二十六日条)。バイエルン本とともに、「葵紋」の袱紗断片が伝

来するというのも、彼女が徳川家康の養女であったことと関わりがあるのかもしれない。

箱表の家紋「三階菱」に気づいてから、このひとつの結論に至るまで、ものの十五分もかかっただろうか。私はほとんど端で見ていたようなもので、あれよあれよという間のできごとであった。さすが、専門の方々の学識には、恐れ入るばかりである。と同時に、バイエルン本をご紹介くださった前述の辻氏に加え、このような方々と出会う機会に恵まれたことに、これまた感謝せずにはいられない。

五 箱表の図柄——淀か宇治か——

このようにして、最初の疑問については、一応の結論を導き出すことができたわけだが、バイエルン本に関して、疑問がすべて解けたわけでは、当然ない。たとえば、木札の裏に記されていた「淀」の文字については、地名の「淀」を指すのなら、箱表の図柄は淀の情景か、といったのは考えてみるのだが、どうも『源氏物語』の本を入れる箱に淀の情景というのはびんとこない。箱表には、画面を横切つて橋が描かれるが、『源氏物語』で橋といえは、宇治十帖の舞台となった宇治を流れる宇治川の橋、宇治橋しかないのではないか。

ここでもう一度、前掲の箱表の図柄を見ていただきたい。例の家紋「三階菱」が右上方に二つと、左上方にひとつあり、左の家紋のあたりには、五羽の鶴が飛んでいる。鶴はもちろん、輿入れのめでたさを表すものだろう。その下と、画面右隅に見える格子状のものは、平安時代であれば「網代」といいたいところだが、ここは「蛇籠」(竹材などで編

んだ長い籠。碎石を詰め込み、河川の護岸に用いる。)である。蛇籠は、たとえば、『宇治橋図屏風(柳橋水車図)』(東京国立博物館、画像番号:C0005746、 列品番号:A-10447、 時代:桃山時代—16c、 形状:各1548×327.5、 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0005746>)にも描かれており、治水に欠かせないものである。

さて、肝心の橋であるが、どうやら画面右端の欄干が、左斜め上に張り出しているようである。これはいわゆる、宇治橋の「三の間」(橋の西詰から三つ目の柱間に設けられた、上流側に張り出した部分。)であろう。宇治橋の特徴である。そうすると、川は、画面左方から右方へ流れていることになる。すると、右上方の建物は、平等院であろう。ならば、近くの枝葉を垂らす立派な木は、藤か。また、画面中央の岸に立つ木は、同じ木が、画面右下方にも描かれているようである。和歌表現として藤との組み合わせを考えるならば松であろうが、やや枝振りが異なるようにも思われる。また、『源氏物語』浮舟巻になぞらえれば、「橋の小島」の橘か。さらに、葉の形から推測するに、桐であろうか。もしこれが桐ならば、桐箆筒を嫁入り道具に持参する伝統文化の意匠化とも見られようが、あるいは、小笠原(清和源氏義光流)のもうひとつの家紋、五七桐(前掲『新訂寛政重修諸家譜』参照)を暗示したもののか。

六 おわりに

バイエルン本は、本そのものの豪華さや、箱表の鶴の文様などから、やはり嫁入り本であることには相違あるまい。そして、箱表の小笠原家紋「三階菱」によって、該本の書写者とされる小野お通の時代の小

笠原家の女子、萬姫が、慶長五年正月、松平阿波守至鎮に輿入れする際に製作されたものか、との新たな可能性を指摘した。また、箱表の図柄は、「淀」ではなく、『源氏物語』宇治十帖にちなんだ宇治橋の情景ではないか、というひとつの見解にも行き着いた。

だが、ここまで考察してきて、さらに深まる疑問もある。手習巻見返しの文様である。



この夕顔の丸紋散らしの文様は、果たして何を意味するものか。この点も含めて、大方のご批評、ご教導を仰ぎたい。

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究、二〇一九〜二〇二二年度)、および「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」(科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号16K00469、二〇一六〜二〇一九年度)による夏の研究集会(令和元年(二〇一九)八月二十日)における発表の一部である。席上、ご教示くださった方々にも厚く御礼申し上げます。